

Psychiatry and Clinical Neurosciences

Psychiatry and Clinical Neurosciences, 74 (8) は, Regular Article が 3 本掲載されている。国内の論文は著者による日本語抄録を, 海外の論文は PCN 編集委員会の監修による日本語抄録を紹介する。

Regular Article

Lifetime cocaine use is a potential predictor for conversion from major depressive disorder to bipolar disorder : A prospective study

*T. d. A. Cardoso**, *K. Jansen*, *T. C. Mondin*, *F. P. Moreira*, *S. d. L. Bach*, *R. A. d. Silva*, *L. D. d. M. Souza*, *V. Balanzá-Martínez*, *B. N. Frey* and *F. Kapczinski*

*1. Mood Disorders Program, Department of Psychiatry & Behavioural Neurosciences, McMaster University, Hamilton, Canada, 2. Department of Health and Behavior, Catholic University of Pelotas, Pelotas, Brazil, 3. Instituto Nacional de Ciência e Tecnologia Translacional em Medicina (INCT-TM), Porto Alegre, Brazil

コカインの生涯使用は大うつ病性障害から双極性障害への移行の予測因子となりうる：前向き研究

【目的】本研究の目的は, 成人の外来患者において生涯にわたるコカインの使用が大うつ病性障害 (MDD) から双極性障害 (BD) への移行のリスク因子となる可能性について判定することであった。【方法】本前向き研究は, ベースライン時 (2012~2015年) に精神疾患簡易構造化面接法 (Mini International Neuropsychiatric Interview : MINI-Plus) を用いた評価により MDD と診断された 18~60 歳の患者 585 名を対象とした。平均して 3 年後 (2017~2018 年) に患者が BD に移行した可能性について

MINI-Plus による再評価を行った。コカインの生涯使用については, 飲酒・喫煙・薬物関与のスクリーニング検査 (Alcohol, Smoking, and Substance Involvement Screening Test) により評価した。【結果】2 回目の評価では患者 117 名 (20%) が脱落し, 468 名を再評価した。3 年経過後の MDD から BD への移行率は 12.4% (n=58) であった。性別・年齢などの人口統計学データおよび臨床的な交絡因子で補正したロジスティック回帰分析では, ベースライン時にコカインの生涯使用を報告した患者が MDD から BD へ移行するリスクは, コカインの生涯使用を報告しなかった患者より 3.41 倍高いことが示された (95% 信頼区間 : 1.11~10.43)。【結論】本研究の結果, MDD コホートにおいてコカインの生涯使用は BD への移行の予測因子となりうることを示された。コカインの使用と BD への移行を関連づける基本的機序を検討するにはさらなる研究が必要である。

Regular Article

Low dopamine transporter binding in the nucleus accumbens in geriatric patients with severe depression

*H. Moriya**, *M. Tiger*, *A. Tateno*, *T. Sakayori*, *T. Masuoka*, *W. C. Kim*, *R. Arakawa* and *Y. Okubo*

*Department of Neuropsychiatry, Graduate School of Medicine, Nippon Medical School, Tokyo, Japan

老年期重症うつ病患者における側坐核ドパミントランスポーター結合の低下

【目的】中枢神経系のドパミン作動性神経細胞の機能障害は, 大うつ病性障害 (MDD) に関連していると考えられている。特に老年期患者の MDD は, 報酬系のドパミン神経伝達の低下と関連していると推測されるアンヘドニア (無快楽症) が特徴的

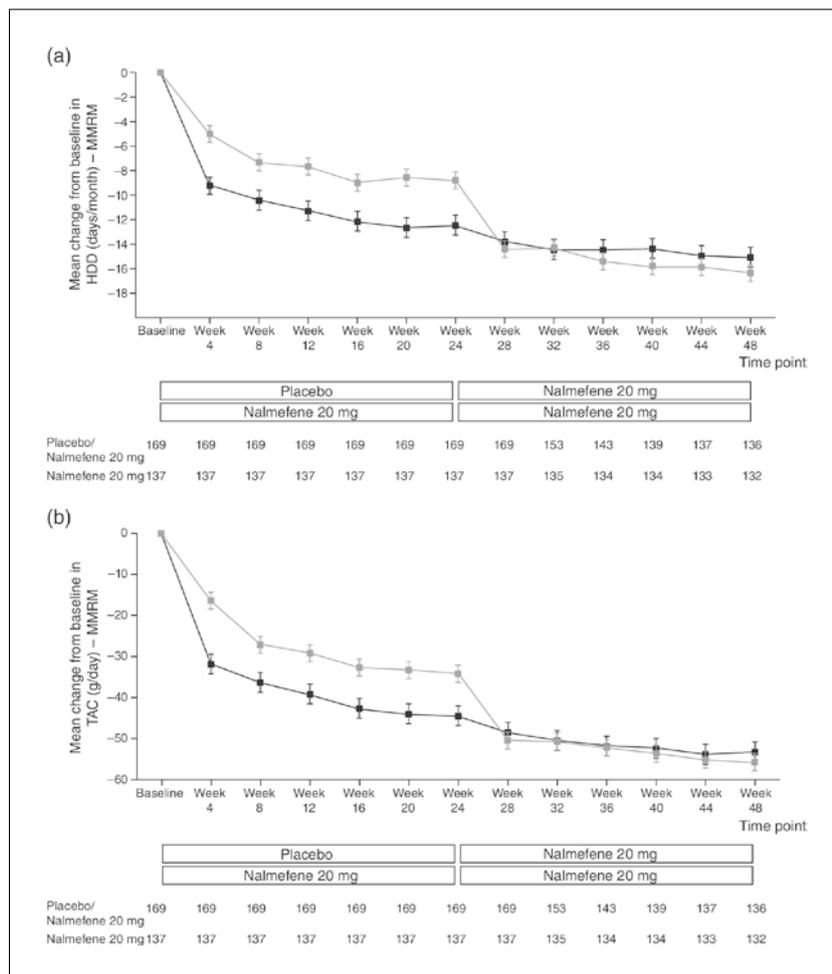


Figure 2 Change from baseline by treatment group (nalmefene 20 mg vs placebo) in the (a) number of heavy drinking days (HDD ; days/month) and (b) total alcohol consumption (TAC ; g/day). Data obtained using mixed model for repeated measures (MMRM) analysis of the full analysis set. Values presented as least squares mean \pm standard error. The number of patients at each time point is shown below the x-axis. Nalmefene 20 mg group : patients treated with nalmefene 20 mg throughout the 48-week treatment period ; placebo/nalmefene group : patients treated with placebo during Week 0 to Week 24 followed by nalmefene 20 mg during Week 24 to Week 48 (—■— Placebo/nalmefene 20 mg and —■— Nalmefene 20 mg).

(出典 : 同論文, p.435)

である。ドパミントランスポーター (DAT) は、ドパミン神経系の機能を反映していると考えられている。しかし、SPECT や PET を用いたこれまでの DAT イメージング研究では、一貫性のない結果が示されてきた。PET 用放射性リガンド $[^{18}\text{F}]\text{FE-PE2I}$ を使用することで、DAT 機能をより正確に評価することが可能となった。そこで、われわれは高齢の MDD 患者における DAT 機能を $[^{18}\text{F}]\text{FE-PE2I}$ を用いて評価することを目的として研究を行った。【方法】重症の高齢 MDD 患者 11 名と健常者 27

名を対象に、DAT に対する選択性が高い $[^{18}\text{F}]\text{FE-PE2I}$ を用いた PET 検査を実施した。線条体(尾状核および被殻)、側坐核、中脳黒質における結合能を求めた。MDD 群と健常対照群の間で結合能の値を比較した。【結果】MDD 患者は、側坐核において健常者と比較して有意に低い ($P=0.009$) DAT 結合能を示した。また、MDD 患者は健常者と比較して被殻において結合能が低い ($P=0.032$) 傾向を示した。【結論】われわれは、老年期の重症のうつ病患者において、側坐核と被殻の DAT が低下してい

ることを見いだした。この所見は報酬系の機能障害を反映している可能性がある。

Regular Article

Long-term safety and efficacy of nalmefene in Japanese patients with alcohol dependence

S. Higuchi*, M. Takahashi, Y. Murai, K. Tsuneyoshi, I. Nakamura, D. Meulien and H. Miyata

*National Hospital Organization, Kurihama Medical and Addiction Center, Yokosuka, Japan

日本人アルコール依存症患者におけるナルメフェンの長期安全性および有効性

【目的】飲酒量として WHO Drinking Risk Level が high または very high の日本人アルコール依存症患者を対象に、第Ⅲ相、多施設共同、無作為化、二重盲検、プラセボ対照試験（先行試験）にてナルメフェン塩酸塩の安全性および有効性が評価され

た。本稿では、先行試験からの非盲検継続試験で得られたナルメフェンの長期の安全性および有効性の結果を報告する。【方法】本継続試験では、24週間の先行試験を完了した患者を対象として、ナルメフェン塩酸塩 20 mg を 24 週間頓用した。ナルメフェン塩酸塩 20 mg を合計 48 週間頓用した際の長期間の安全性および有効性を評価した。本試験期間における有害事象および、多量飲酒日数と総飲酒量のベースラインからの変化量を測定した。【結果】ナルメフェン塩酸塩 20 mg の長期投与は忍容性が高かった。5%以上の患者で発現した主な有害事象は、鼻咽頭炎 (37.2%)、吐き気 (36.5%)、眠気 (21.2%)、めまい (16.8%)、倦怠感 (14.6%)、嘔吐 (12.4%) であった。ベースラインから 48 週の試験期間において、多量飲酒日数および総飲酒量に減少がみられた〔それぞれの最小二乗平均±標準偏差は -15.09 ± 0.77 日/月、および -53.20 ± 2.29 g/日、mixed model for repeated measures (MMRM) による解析〕。【結論】Drinking Risk Level が high または very high の日本人アルコール依存症患者における長期的な評価により、ナルメフェン塩酸塩が安全で忍容性が高く、かつ有効であることが示された。